

能格的なものの発展をめぐる(10)

近藤 健 二

この稿の主題は文法における三つの性である。そしてこの稿の主目的は、性の起源を史的類型論の見地から問うことである。ここでいう三つの性とは、インド・ヨーロッパ語の名詞や代名詞に見られる男性・女性・中性という区分けのことである。またその起源を史的類型論の見地から問うというのは、インド・ヨーロッパ語が過去にこうむった類型的变化の全貌を視圏におさめて性の源泉を探りあてるとのことである。

論の構成は以下のようになっている。はじめの第1節で、文法的な性とはそもそも何であるかということ、つまり性が文法現象としてどのように実現しているかについて論じる。第2節では、文法的な性の起源をめぐる諸説を概観する。第3節は本論である。ここでは、有生・無生という二つの生の組織が男性・女性・中性という三つの性の組織に組み換えられていく過程を、主語の形態の画一化をはかるうとする定向変化の一側面としてとらえる。

1. 文法の中の性

文法的な性の起源についての考察は、文法カテゴリーとしての性の何たるかについての知識が前提となる。言葉を換えていうと、文法的な性の起源は、文法の性が自然の性あるいは擬人的な性とどう異なるかを知ったうえでそれを求めなければならない。したがって、この節では性が文法の中でどのように成立しているかについていくぶん立ち入った説明をすることになる。

まず、結論を先に述べることから始めよう。文法的な性というのは、インド・ヨーロッパ語についていうと、名詞・代名詞・形容詞の形態にかかわるカテゴリーである。これを敷衍して以下のように規定しても大過あるまい。性はまず第一に、名詞の形態を分類するためのものである。たとえば古期英語の男性・女性・中性というカテゴリーは、名詞が数と格のちがいにに応じて語形変化するさいの屈折の型を三つの類に振り分けるための分類枠である。文法的な性を意味する英語の^{ジェンダー}genderが実際フランス語の^{ジャンル}genreと同様に、もともとは「類」という意味で用いられたことを承知しておくべきであろう。

性はしかし、名詞の屈折の型によってのみ定まっているわけではない。それゆえ、名詞の屈折の型と同数の性が存在するわけではない。かりに両者の数が一致しなければならぬとしたら、古期英語には少なくとも六つの性を認めることになる。すなわち、

不規則変化の名詞を別にしても、1) 男性強変化名詞、2) 男性弱変化名詞、3) 女性強変化名詞、4) 女性弱変化名詞、5) 中性強変化名詞、6) 中性弱変化名詞に対して、それぞれ異なる性を付与しなければなるまい。

文法的な性というのは第一に名詞の屈折の仕方にかかわるカテゴリーではあるけれども、同時にそれは名詞を修飾する形容詞などの形態にかかわるカテゴリーでもある。すなわち、前述のとおり古期英語の名詞にはおおよそ六つの型の屈折が存在し、それを敢えて男性・女性・中性という、三つの類に統合しているのだが、同じように名詞を修飾する形容詞などにも大きく三つの型があって、たとえばA類（男性）の屈折の型を有する名詞を修飾するにはA類専用の屈折の型を用い、B類（女性）の屈折の型を有する名詞を修飾するにはB類専用の屈折の型を、C類（中性）の屈折の型を有する名詞を修飾するにはやはりC類専用の屈折の型をあてたのである。

このように名詞を修飾する形容詞などの屈折に三つの型が存在したという事実こそ、古期英語に三つの性を認め、それ以上の性を認めないことの正当な根拠を与えている。いまここで、屈折の型を異にする古期英語の名詞 *stan* (> *stone*)、*talū* (> *tale*)、*scip* (> *ship*) を例にとって、それらが *se god* (> *the good*) の修飾を受ける場合に、それぞれの語がどのように格変化したかを示すことによって、修飾語の語形変化に三つの類型が存在したことを確認しておこう。

	単数	複数
A 類型	主格 <i>se god stan</i>	<i>þa godan stanas</i>
	属格 <i>þæs godan stanes</i>	<i>þara godra stana</i>
	与格 <i>þæm godan stane</i>	<i>þæm godum stanum</i>
	対格 <i>þone godan stan</i>	<i>þa godan stanas</i>
B 類型	主格 <i>seo gode talu</i>	<i>þa godan tala</i>
	属格 <i>þære godan tale</i>	<i>þara godra tala</i>
	与格 <i>þære godan tale</i>	<i>þæm godum talum</i>
	対格 <i>þa godan tale</i>	<i>þa godan tala</i>
C 類型	主格 <i>þæt gode scip</i>	<i>þa godan scipu</i>
	属格 <i>þæs godan scipes</i>	<i>þara godra scipa</i>
	与格 <i>þæm godan scipe</i>	<i>þæm godum scipum</i>
	対格 <i>þæt gode scip</i>	<i>þa godan scipu</i>

さて、性というものを文法カテゴリーとして認めざるをえないもう一つの重要な文法現象がある。代名詞を用いてある名詞を指し示す場合、その名詞がどの型の形態変化を

するかによって、それを指す代名詞の形が異なったというのがそれである。これは要するに、A類、B類、C類の名詞を指すのに、それぞれA類、B類、C類専用の代名詞の形態をあてたということである。たとえば、上記のstan、talū、scipを指すのに用いられた人称代名詞の形態は以下のように区別された。

	単数					複数			
	主格	属格	与格	対格		主格	属格	与格	対格
stan 「石」	he	his	him	hine	}				
talū 「話」	heo	hiere	hiere	hie		hie	hiera	him	hie
scip 「船」	hit	his	him	hit					

このように三つの類の名詞がそれぞれ専用の代名詞形をもっていたという点にこそ、文法的な性が単に類としてではなく、まさに性として意識されるようになった心理的要因を求めなければなるまい。繰り返す述べるように、古期英語の名詞には大きく三つの種類（もう少し厳密には六つの種類）の屈折の型が存在し、名詞を修飾する形容詞などにもそれに対応する三つの型が存在したのであるが、もしかりに文法的な性に関してこれだけの現象しか観察されなかったとしたならば、古期英語の名詞には男性と女性と中性の区別が存在したなどとはいわれないであろうし、そのように意識されることもなかったであろう。その場合にはおそらく、名詞や形容詞にはA類、B類、C類の区別があるとか、類、類、類という屈折の型があるなどといわれるだけであろう。古期英語の名詞を男性、女性、中性名詞という名で区分するのは、またそういうものとして意識するのは、まさに名詞を指示する代名詞にA、B、Cという三つの異なる形が存在し、なおかつそれらの形のうち、たとえばAが典型的には自然界における男性を指して用いる形であり、Bが典型的には女性を指して用いる形であり、Cが一般に無生物あるいは中性的な事物を指して用いる形であったからにほかならない。

以上のように、文法的な性というのは名詞における格変化の型と、名詞の修飾語における格変化の型と、名詞を指し示す代名詞の形態にもとづいた区別である。

2. 性の起源についての諸説

文法的な性の起源については、定説もなければ通説もない。この問題についてかつて華々しい論争が行われはしたけれども、その決着はいまだについていない。むしろ、決着がつくことはもはやあるまいといったぐあいに決着しているようにさえ思われる。

性の起源に関する諸説のうち最初にふれなければならないのはヘルダー（1772）以来の擬人的ないしは象徴的起源論である。これはグリム（1837）によって広く知られるようになった考えで、文法的な性というのは未開人のアニミズムの精神から発したというものである。つまり、たとえば「太陽」のような「強大で、活動的なもの」はいかにも男性的なイメージをもっているからそれを男性とみなし、たとえば「月」のような「繊細で、やさしく、柔らかなもの」は女性的なイメージをもっているからそれを女性扱いするといったふうに、人間の想像力によって自然界における性を無生物の段階にまで拡張してできたものが文法的な性である、とグリムは説いたのである。

こういういわばロマンティックな考えに反駁を加えたのがブルックマン（1904）である。その論に従えば、性は接尾辞のちがいによって区分される。したがって、性の区分は接尾辞の類推によって生まれたものであるという。すなわち、mama「母」やgena「女」のような女性を表す語との類推で-aが女性語尾とみなされ、たとえばdeus「神」からdea「女神」、equus「馬」からequa「牝馬」といった語がつくられた結果、男性語尾-(o)sと女性語尾-aとの対立が生まれたというのである。

グリムとブルックマン以後も、多くの学者が性の起源について自説を唱えている。スウィート（1920:59-60）は、ブルックマンの説を支持しつつ、最初は男性名詞と女性名詞の区別があって、中性名詞は後に生じたものであるとした。しかし一方、女性名詞はもともと集会的・抽象的な意味を表し、男性名詞はもともと個別の意味を表したとも述べている。

メイエ（1937⁸）の見解は、三つの性が生まれた順番に関して、スウィートのそれとは明らかに異なっている。メイエによれば、はじめに男性と中性の区別があり、女性名詞はその後に生まれたものであるという。またメイエは、中性名詞は主語となることが少なかったために主格を欠き、やがてその対格が主格の役を兼ねるようになったことが男性から中性が派生した原因とみなしている。

ヴァンドリエス（1952:96）は、グリムの考えを踏襲した。彼によると、文法的な性は遠い祖先たちが抱いていた世界観の反映としてはじまり、神秘的・宗教的精神がその安定化に寄与したという。そして、本来の意図が理解されなくなった後も伝統的形態が長く保持されたという。

一方、パロウ（1955:122）とセメレーニイ（1970:143）は、はじめに汎性（有生）と中性（無生）の二つがあり、やがて汎性は男性と女性に分化したとしている。たとえば、deus「神」は汎性であったが、これからdea「女神」のような形が派生したという。

最後に、シールズ（1982）の説を紹介する。シールズは、インド・ヨーロッパ語に属する最古の言語であるヒッタイト語の性を他の言語の性と比較考量して、両者の間に以下のような対応関係が観察されると述べている。

た時代のインド・ヨーロッパ語に言語変化を誘発する体系のひずみ、あるいは文法の不画一があったことになる。それはいったい何であったのか。

前稿で論じたように、インド・ヨーロッパ語はかつて能格言語であった。それは活格言語に変わった。そして活格言語は主格言語に変わった。これらは膨大な時間の流れにそって進行した二つの変化であったけれども、以下に述べるように、その根底には一つの共通の力が持続的に駆動していた。この意味において、それらは一つの大きな変化の異なる側面であったということもできる。

はじめに、能格言語から活格言語への変化が何によってもたらされたかを考えてみよう。この変化をひとことで特徴づけるならば、それは他動詞文主語の接辞を自動詞文主語の一部に波及させようとする変化であった。これは以下のように図示できる。

	能格言語	活格言語
他動詞文主語	-(o)s	-(o)s
自動詞文主語	-	$\left. \begin{array}{l} -(o)s \\ - \end{array} \right\}$

能格言語では、他動詞文主語に能格と呼ばれる特別の形態があてられた。-(o)sは、そのような能格を標示する形態であった。ところが、-(o)sの付く他動詞文主語はきまって行為を表したため、行為を表す自動詞文主語にも-(o)sが付くようになった。このような変化が起こったのは、他動詞文主語と自動詞文主語の形態的不均衡を是正しようとする力が作用したからであろう。

能格言語の活格言語化が主語の形態的統合をはかるための第一段階であったとすれば、活格言語の主格言語化はその第二段階として位置付けることができる。活格言語では、自動詞文において主語の形態が二つに分断されていた。そこで、分断された二つを一つに統一するため、状態の主体を表す名詞にも-(o)sという接辞を添加しようとした。これこそが活格言語を主格言語化に導いた根本的原因である。この変化は以下のように図示できる。

	活格言語	主格言語
他動詞文主語	-(o)s	-(o)s (有生名詞) / - (無生名詞)
自動詞文主語	$\left\{ \begin{array}{l} -(o)s \text{ (行為の主体)} \\ - \text{ (状態の主体)} \end{array} \right.$	-(o)s (有生名詞) / - (無生名詞)

有生・無生という二つの生のはじまりは、状態を表す自動詞文の主語に活格語尾が越境したことに端を発した。このことは前稿で論じたことであるから繰り返さない。ここで考察の対象とするのは、有生・無生の二項対立が生まれた後のことである。すなわち、有生・無生の二項対立が何ゆえに、そしてどのようにして男性・女性・中性という三項対立に変移したかということである。

まず、「何ゆえに」と問われれば、やはりこの場合にも「主語の形態の統一をはかるため」と答えねばなるまい。活格言語が主格言語に移ってからも、主語は、有生主語が無生主語かによってその形態が異なった。なるほど、このような差異は有生・無生の体系を支える屋台骨ではあった。がしかし、それは文法をいくぶん複雑にした。そこで、これを単純化しようとする力が働いた。主語の形態的統一をはかるようとする力が作用したのである。こうして、有生物を表す主語(すなわち有生主語)に特有であった-(o)sという接辞が無生物を表す主語(すなわち無生主語)にも添加されるようになった。この変化は主語の形態を画一化するための第三段階であったが、それは同時に、男性・女性・中性という新たな不画一を生む発端ともなった。

有生・無生の二項対立は主語の形態的差異を最大の基盤にしていたのであるから、その画一化は有生・無生の対立が解消することを意味した。ここで問題は、二つの生の対立軸の崩壊が何ゆえに三つの性の発生を惹起したかということである。言葉を換えていう。主語の形態が画一化されるということは有生・無生という名詞区分の存続にとって決定的に不都合な変化であった。だからこそ、インド・ヨーロッパ語はその区分を廃止したのである。しかしこのことと、男性・女性・中性という新たな名詞区分が形成されたこととどのような必然的なつながりがあったのか。以下の図をもとに、この疑問に答えよう。

	第 期	第 期	第 期
有生主語	-(o)s	-(o)s	$\left\{ \begin{array}{l} -(o)s \\ -a \end{array} \right.$
無生主語	-	$\left\{ \begin{array}{l} -(o)s \\ - \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} -(o)s \\ -a \\ - \end{array} \right.$

これは主格言語の発展過程を主格接辞に注目して大まかにデッサンしたものである。第 期は名詞が有生名詞と無生名詞とに分かれていた時期である。これら二つの生がどのように生まれたかについては前稿で論じた。本稿で論じるのは、三つの性の揺籃期で

ある第 期と、その最盛期である第 期についてである。

最初に第 期に注目する。この時期には主格接辞-(o)sが無生主語にも付されるようになった。有生・無生の仕切りが失われ、その代わりに男性・女性・中性という新たな仕切りができた。この変化、つまり二つの生から三つの性への変化をとりもったのは代名詞である。

代名詞の性について重要なことを指摘しておかねばならない。代名詞には文法的な性が生まれる以前から三つの性の区別が確実にあったはずである。それは文法的な性をもたない多くの言語に見られるのと同種のもので、日本語の「彼」「彼女」「それ」、英語の he、she、itのような区別であったろう。このような区別、いわば自然的な性の区別が代名詞に存在したということは、現実世界における有生物が男性・オスの場合と女性・メスの場合とでは、それを指し示す代名詞の形が異なったことを意味している。そしてまた、これらの代名詞形が現実世界における中性的な事物を指し示す代名詞形とも異なったことを意味している。このことが文法的な性の誕生とどのようにかかわったかを以下に述べる。

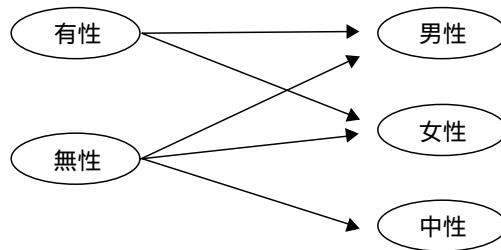
主格接辞-(o)sは有生名詞の標識であった。これが無生名詞に波及した。その結果、名詞分類がどう変わったか。-(o)sの無生名詞への波及は長い年月の中で徐々に進行的な変化、いわばのんびりとした変化であったので、-(o)sを早くに獲得した無生名詞とそれをなかなか獲得できなかった無生名詞とがあった。-(o)sというラベルを貼られた無生名詞は、そのラベルゆえに、有生名詞との見分けがつかなくなった。こうして有生名詞の仲間入りを果たした無生名詞は、代名詞との関係においても、在来の有生名詞と同じ扱いを受ける資格を得た。つまり、無生物を指すための代名詞形によってではなく、有生物を指すのと同じ代名詞形によってそれを指し示すことが許されるようになった。というより、そのような扱いを実際に受けてこそ、無生名詞は有生名詞への変身を遂げることができたのである。しかし、そのような扱いを受けるには一つの障害を乗り越えねばならなかった。

乗り越えなければならない障害とは、-(o)s語尾をまとうようになった名詞、すなわち無生物を表す名詞に性を付与することであった。性を付与するとは、現実には性をもたない無生物を男性か女性に見立てることである。これは代名詞を使用するうえで不可欠な措置であった。これをしなければ、たとえば「太陽」や「石」を表す名詞が-(o)s語尾を得たとしても、たとえば「父」を男性代名詞で指し、「母」を女性代名詞で指すように、それらの名詞を有生名詞に専用の代名詞形によって指し示すことができなかったからである。

そこで、インド・ヨーロッパ語は-(o)sが付くようになった名詞を男性と女性に振り分けようとした。すなわち、男性的イメージを喚起する名詞は男性名詞として男性代名

詞によってそれを指し示し、女性的なイメージを喚起する名詞は女性名詞として女性代名詞によってそれを指し示すようにしたのである。このように性が付与されたのは、もちろん n -(o) s 語尾を獲得した名詞だけである。それを獲得できなかった名詞は中性名詞となった。中性名詞は男性名詞と女性名詞の間に位置するものではなく、男性・女性のいずれの性も与えられなかった名詞であると見なさなければならない。

以上の推論をもとに、有生・無生という二つの生と男性・女性・中性という三つの性のと歴史的対応関係を図示すれば以下ようになる。

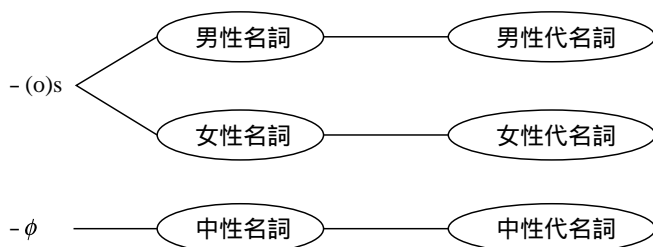


ここで改めて問う。文法的な性はなぜ生まれたのか。現実の世界では性をもたない無生物を文法の中で男性扱いしたり女性扱いしたりすることにどういう利点があったのか。それは現実と言語との配線関係に狂いを生じさせた。文法の中に現実とは違った性の区分が生まれればそれをいちいち憶えなければならない。それを習得するための余分な労力が必要となる。これは確かに文法的な性の負の側面である。にもかかわらず、文法の中に性の区別ができた。それは文法の自律性を高めるためであった。主格接辞 $-(o)s$ の付く名詞が有生物・無生物のいずれを表そうと、それらを男性・女性のいずれかに振り分けてしまえば、文法そのものは単純になる。単純になるということの意味はこうである。文法的な性が生まれる前、名詞に有生・無生の区別があった。また、代名詞には自然の性を反映した区別があった。生と性とがいわば同居していたのである。これらを文法的な性に一本化すれば確かに文法の単純化をはかることができた。実際、男性・女性・中性という文法的な性の成立は言語の現実反映を犠牲にして文法自体の自律性を追求したことによる結果である。つまり、現実世界では性をもたない事物に文法の中で性を与えることは文法を現実から乖離させることになったけれども、それは文法の整合性を高めることになったのである。

ここまでは文法的な性が生まれるまでの話である。それが生まれた後の消滅に向かうまでの話はこれからである。主格言語の発展過程を素描した上掲の図でいうと、今から論じようとするのは、文法的な性の揺籃期である第 期からその最盛期である第 期にかけて起こった変化についてである。

文法的な性の体系が第 期のそれから第 期のそれへ変わったのは、変化を許容する

何か、あるいは強要する何かがあったからにちがいない。それが何であるかを下の図から探ってみよう。



これは第 期における性体系の骨格である。この図から体系上の不整合ないしは欠陥がはっきりと読み取れる。男性名詞と女性名詞とは主格接辞が同形であったので、それを見ただけでは男性と女性の区別がつかない。両者の区別はいわば丸暗記しなければならなかった。その知識は事物が男性的か女性的かというイメージと結びついていたと考えられるが、それにしても非常に多数にのぼる名詞の性を憶えきるのは容易なことではなかったろう。このことが刺戟要因となって一つの変化が起こった。それは男性名詞と女性名詞がまとう衣装を別々にすることであった。こうして女性名詞には-aないしは-iという女性語尾が付くようになった。これが主格言語の第 期から第 期にかけて起こった変化の核心である。

以上のように、男性と女性の区別はその語尾が違っていたから生まれたのではない。代名詞の使用を通じて男性名詞と女性名詞の区別が先に生まれ、それを支えるための形態分化が後で起こったのである。こうして男性語尾-(o)sと女性語尾-aまたは-iとが区別されるようになった。ブルックマンは形態の違いが性の区別を生んだと力説したが、この主張は到底受け入れられるものではない。事實は、ほとんどその正反対であったのであるから。このことは、たとえばサンスクリットで男性名詞と女性名詞が基本的に同じ格変化をしたという事実によって有力な裏付けを得ることができる。サンスクリットにおける名詞の主格・対格接辞（強変化）を示してみよう。

		单数		両数		複数	
		主格	対格	主格	対格	主格	対格
男性 } 女性 } 中性 }	男性	-s	-am	-au	-au	-as	-as
	女性	-	-	-i	-i	-i	-i
	中性	-	-	-i	-i	-i	-i

サンスクリットの主格接辞-sは理論上の格語尾、あるいは歴史的な格語尾といわれている。音声的環境によって-hになることがあったからである。ちなみに、パーリ語では中性単数主格・対格語尾が-mとなるとともに-sが消失している。このように-sは、インド・ヨーロッパ語に属するすべての言語において男性名詞の標識になったのでは決していない。

ところで、ゲルマン諸語の一つであるゴート語では強変化名詞の主格接辞は男性名詞では-s、女性名詞では-aまたは-i、中性名詞では（ゼロ）となるのが一般的であったけれども、女性名詞の中に男性名詞と同じ格変化をするものがあった。これは、男性・女性が同形であった時代の名残りであったと見なされる。下に、男女同形の例として男性名詞sunus「息子」と女性名詞handus「手」の格変化を示しておこう。

	男性	女性	
単数	主格	sunus	handus
	属格	sunáus	handáus
	与格	sunáu	handáu
	対格	sunu	handu
複数	主格	sunjus	handjus
	属格	suniwē	handiwē
	与格	sunum	handum
	対格	sununs	handuns

この稿を閉じるにあたって、過去の研究者たちが不問に付してきた問題、1世紀以上にわたって放置されてきた問題のあることを指摘しておきたい。上に示したhandusが女性名詞と見なされるのは、それが女性代名詞によって指し示されるからである。これが事実として確認されなければ、handusを女性名詞とする理屈は成り立たない。それぞれの名詞についての性の確定は、従来、こういう確認作業をしたうえでなされてきたのだろうか。はなはだ疑わしく思われる。というのも、たとえば古期英語のwif(>wife)は女性を表しながら中性名詞であるとされてきたが、それを代名詞によって指し示すときには女性形が用いられたからである。ゴート語のhandusを女性と判定するときの基準と古期英語のwifを中性と判定するときの基準は明らかに違っている。つまり、前者はそれを指すときに用いる代名詞が女性形であるから女性名詞とされ、後者はそれが中性名詞と同じ語形変化を有するから中性名詞とされているのである。この問題は稿を改めて論じなければならない。

引用文献

- ヴァンドリエス Vendryés, Joseph (1952) *Language: a linguistic introduction to history*. Trans. by Paul radin.
London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- グリム Grimm, Jacob (1937) *Deutsche Grammtik*. Vol.4. Gottingen:Gutersloch.
- シールズ Shields, Kenneth (1982) *Indo - European noun inflection: a developmental history*. University Park
and London: The Pennsylvania State University Press.
- スウィート Sweet, Henry (1920) *The history of language*. London: Dent.
- セメレーニイ Szemerényi, Oswald (1970) *Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft*. Damstadt:
Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- バロウ Burrow, T (1955) *The Sanskrit language*. Glasgow: The University Press.
- ブルックマン Brugmann, Karl (1904) *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*.
Strassburg: Kart J. Trübner.
- ヘルダー Herder, J. G. von (1772 , 1789²) *Über den Ursprung der Sprache*. (木村直司訳 『言語起源論』大
修館書店 , 1972)
- メイエ Meillet, Antoine (1937⁸) *Introduction à l'étude Comparative des langues indo-européennes*. Paris:
Hachette. (Reprint by University of Alabama Press, 1964)